ゐのはな

千葉大学医学部同窓会報 第118号 題字 故 鈴木五郎（大11卒 元ゐのはな同窓会長）

編集発行者
千葉大学医学部
ゐのはな同窓会報編集部
〒260-8670 千葉市中央区亥鼻1-8-1
千葉大学医学部内
ゐのはな同窓会
電話（043）222-7171 内線5026

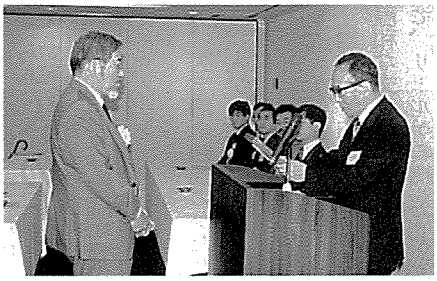
平成十年度 ゐのはな同窓会総会開催

平成10年度ゐのはな同窓会総会が、平成10年6月13日(土)午後3時より、千葉駅ビルのペリエにおいて開催された。

渡辺武副会長の開会の挨拶の後、会議に先立って、物故者68名の冥福を祈り、黙祷をささげた。井出源四郎会長挨拶に続いて、木内政寛理事より会務報告があった。また議題については各担当理事から説明があり、審議承認された（詳細は6面に掲載）。

引き続き、平成10年度ゐのはな同窓会賞の表彰式が行われた（関連記事は本号6面および119号に掲載）。

総会終了後の懇親会では同窓会活性化について有益な意見が交わされ、極めて有意義な会となった。



ゐのはな同窓会賞受賞候補者募集要項

第4回（一九九九年度）ゐのはな同窓会賞の受賞候補者を左記により募集致します。

一、受賞対象者

①学術賞　本会員（甲および乙）で、医学研究あるいは医療活動の顕著な業績により、学術的あるいは社会的に高い貢献をした個人またはグループ。特に学外の教育研究診療機関に居られる方と、学内では学位取得直後の層からの応募を歓迎いたします。

②功労賞　医学および広く文化の各領域において、千葉大学医学部および千葉大学ゐのはな同窓会に多大の貢献をした者。

二、表　彰

①学術賞（三件以内）楯および副賞（総額百五十万円程度）を贈呈します。

②功労賞（一―二件）楯および薄謝を贈呈します。

三、応募方法

所定の申請用紙により、一九九九年1月5日から2月15日までの間に申請して下さい。

四、受賞者の決定

常任理事会の議を経て、一九九九年度の総会にて行われます。

五、問い合わせおよび申請用紙請求先

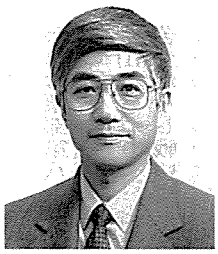
千葉大学医学部内　ゐのはな同窓会事務室

右選考は、「ゐのはな同窓会賞選考規定」（ゐのはな同窓会報第一一六号参照）にもとづいて行われます。

医学部長再任の挨拶

21世紀にむけた医学部改革

谷口　克（昭42卒）



大学にとって、戦後の第一次、第二次ベビーブームは追い風であったが、21世紀は深刻な少子化時代が到来するとあって、今一度大学設置目的から大学の存在を見直すことが求められている。このことは、数の多くなり過ぎた国立大学の統廃合も視野にいれて、各大学が独自性と特色を備えるための改革をし、存在しうる十分な理由を国民に示す必要があることを意味している。

平成10年6月末日にまとめられた大学審議会答申では、社会構造の変革に伴って、今後高等教育を多様化し、世界に向かって情報発信のできる大学に生まれ変わるための改革を求めている。その一つの大きな施策が、学部の規模を縮小し、大学院の拡充を図るというものである。東京大学をはじめとする旧七帝大はすべて、大学院を主体にした大学に衣替えが完了した。いわゆる大学院重点化である。すべて大学院教官となり、大学院学生に講義するとともに、医学部学生に講義をするという形態をとっている。たとえば東京大学の大学院の学生定員は、200名ほどになるため、約1／2以上を他大学卒業者から集める旧帝大集中型となっている。この教育形態は近々法令化されるので、少なくとも旧帝大以外の大学は大きく影響を受けることになる。

現行のままでいると、千葉大学医学部卒業生は旧帝大系の大学院に吸い取られるような事態も起きかねないのである。そんなことになれば、千葉大学医学部は旧帝大系の大学院生養成機関としての地位に甘んじなければならなくなることは明らかである。そこで、われわれの取るべき道はユニークで、社会的要求度の高い教育改革を千葉大学医学部に於いて成し遂げることであろう。

新学長には医学部・附属病院が一致して推薦した磯野可一先生（昭33）がなられた。新学長を先導に大学院重点化構想が進むことを祈念している。さらに、わが医学部では2年前からスタートした教育カリキュラム改革、43年ぶりの教育組織改革による大学院独立専攻の設置、外部評価システムの設立など、他大学に先駆けて医学部改革が進んでいる。これらの教育組織改革は、30年後、50年後先のわれわれの後輩のための改革でもある。

平成10年8月1日から2年間、医学部長を再び拝命することになった。諸先輩をはじめ、教官の皆様のお力を借り、一致団結してこの難局を乗り切る所存である。

医学者の顔と歌人の顔

―桑田次男歌集『ゐのはな』鑑賞批評―

熊坂年成（昭18卒）

『千葉大学医学部百周年記念誌』に元千葉大学学長相磯和嘉先生が「大学短歌会」についてかなり詳しく書いておられる。その中で「昭和十五年以後」の部分が私たち、つまり歌集『ゐのはな』の著者桑田次男名誉教授と筆者熊坂年成との関連などを語っている。

「昭和十七年には熊坂年成らが中心になって初めて大学短歌会の年刊歌集を作った。桑田次男・井出源四郎・高橋有恒・平形義人らの名前も見える。」

歌集『ゐのはな』によれば、右の年刊歌集は『知波奴』という名称である。私は残念にも紛失してしまい、現在手許にない。この小冊子に桑田さんは「麦の丘」と題して十首を発表している。

桑田次男名誉教授は私より一年下で、千葉大学元学長井出源四郎氏らと同級生で、医学部の勉強のかたわら、大学短歌会の一員としてすばらしい短歌作品を書いていた。

当時の桑田さんの印象は温和な文学青年という感じで、リールケの詩集などを読んでおられたのを思い出す。歌人あるいは詩人としての資質は私などより多く持っておられたというのが実感である。

さて、今回思いがけなく御高著、第一歌集『ゐのはな』を戴き、往時を回想しながら、懐かしい思いと共に、著者の歩んだ起伏多い人生、特に医学部助教授・教授として私たちの推測もできない哀歓・苦悩の年月を知り、それにひきつけられて、一気に読破した。

味気なき町にはあれど
夕映の美しきところと
一人なぐさむ

麦畑に青き麦の穂のび
にけり胸の愁よ雲と流
れよ

現在と違って、私たちの時代には東京を通り過ぎて千葉の大学へ行くことには、ある種の抵抗と哀愁があった。巻頭の二首に先ず共感し、青春時代を追想したことである。

千葉大学医学部で教授の職を全うしつつ、短歌を嗜み、歌集を上梓された方は鈴木正夫先生、相磯和嘉先生、および本集の著者桑田次男先生の三氏である。同窓生の中で、歌人として名の通っている方は北原白秋門下の逸材鈴木英夫氏、歌誌『茨城歌人』創刊者田崎秀氏、歌誌『歌と評論』の編集委員である石村貞雄氏および筆者熊坂、歌誌『歩道銚子』主宰江畑耕作氏等である。

話が脇道にそれたが、本論に返す。

落葉松の林の道を追分へひとり行きゆく旅人われは

浅間嶺の麓をたどる夜の汽車のあえぎの遠音きくは侘しも

追分の落葉松の陽だまりにリールケ読まん日もありぬべし

一九四一年（昭和十六年）医学部一年生の秋の作品「信濃追分」は著者に歌を作る喜びを与え、以来時に応じて手帖に歌を書き留めるようになる。

われは東部第八十八部隊の軍医たり国破れしが山河残れり

苦しかりし戦い終り再びを医学の道に戻る喜び

太平洋戦争に応召、まもなく敗戦、そして帰学、細菌学教室に復職、当時の教授羽里彦左衛門先生の知遇を得て、一九四九年（昭和二十四年）八月著者は助教授に昇任された。

阿蘇の原に一本の道通りたり我が行く道もまたひとつなり

研究一途の毎日に著者は生き甲斐を感じ、将来の大成に夢を託していた。しかし、心沈みて実験室の椅子によれば外国に去る思いまたきざし来る

瑠璃色の熱帯魚水槽に泳ぎいつ我に独創の研究あらしめよ

語らざれば憂なきに似たり苦しみに耐えて過ぎたる十年の思い

恩師羽里先生の東京大学転出に伴って、著者の研究生活にも変化が来た。精神的苦痛に耐え、研究と論文執筆を支えとして、独り頑張りぬく毎日であった。

一九六八年（昭和四十三年）著者は教授に選任された。長年月の努力と忍耐の賜であった。一九七五年パリ、ヘルシンキを訪問後、アメリカに渡り、スタンフォード大学でのインターフェロンのシンポジウムに参加した。それは著者の知友を世界に拡げる機会でもあったようだ。

駅ビルの地下の書店にうず高くヘッセの書あり手に取りて見る

対岸はかすみて見えぬボーデン湖いささか老いて渡り行くかな

高層のビルのはざまの青空を光り流れゆく白雲の群

著者桑田さんがライフワークとしたインターフェロンの研究に関係した短歌を期待したが、ほとんど見られず残念であった。桑田さんからのお手紙によれば、これに関連した短歌は次の歌集にのせる予定とのことである。

以上述べてきた通り、歌集『ゐのはな』の著者桑田次男氏は研究者として苦難と喜びの道を歩まれ、同時に歌人として立派な味わいの深い短歌をたくさん残された。

私は学生時代の桑田さん、どちらかといえば自然科学者よりは詩人に近かった桑田さんが頭に残っていて消えない。それだけに今回この歌集を拝見して、感慨にふけらざるをえなかった。大学に残って極めて順調な道を歩まれたとばかり私は考えていたが、人間の内面は外見からではわからない。その点では、短歌という文芸作品を通じて、自己の哀歓をひかえめに、あるいは象徴的に現すことは、自分にとって救いとなると同時に、後世に自分のまことの足跡を残すたいへん有意義なことと思う。本集が文学的にも評価されると共に、自然科学者として真剣に歩んできた著者の姿に感動する人々が多いことを信じて疑わない。

この拙文は下書きもなく、一気呵成に書いたもので、あるいは著者の意に添わない点があるかもしれない。なお『同窓会報』という発表の場を意識して書いたので、同窓各位には共感していただける部分が多いことを期待している。

（歌集ゐのはな：丸善出版サービスセンター一九九八年刊）

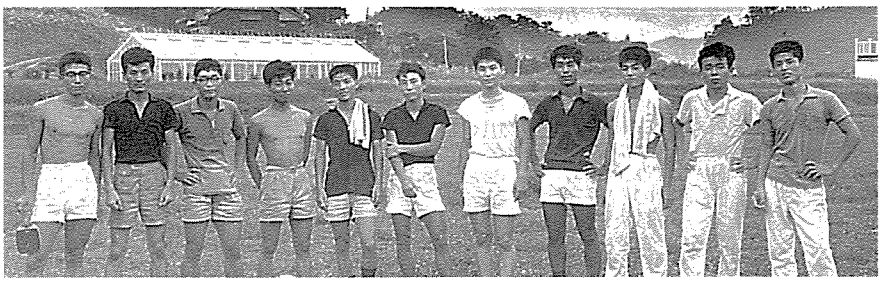
附記　同窓の熊坂年成博士は歌誌「歌と評論」の編集委員の一人であり、日本歌人クラブの委員も長くつとめておられる。発表された歌集には「深夜往診」（昭和四十一年刊）、「白い軌跡（附創作二編）」（昭和四十八年刊）、日本現代歌人叢書「熊坂年成歌集」（昭和六十二年刊）その他がある。

（桑田次男　昭19卒）

懐かしの写真

左の写真の中に、千大現役教授が2人おります。判りますか。

（写真説明は3頁に）



各地ゐのはな会だより

栃木県ゐのはな会

平成10年度栃木県ゐのはな会は1月22日に宇都宮市ホテル・ニューイタヤにて井出元学長と藤沢武彦教授をお迎えして盛大に開催されました。柴崎晃（昭28）幹事の司会および行事報告と高村良平（昭23）会長の御挨拶のあと講演会が行われました。

井出源四郎元学長におかれましては宇都宮の寒さが身にしみたせいか鼻がグシュングシュンしており大変のようでした。

しかしその風邪をおして千葉大学の近況について御講演くださり、頭のさがる思いで一杯でした。

また、新進気鋭の藤沢武彦教授には最新の肺癌治療についてと題して御講演をしていただき、たいへん勉強になりました。

講演会終了後は懇親会に移行し、互いに情報交換をおこなうことが出来ました。

他県でのゐのはな会でも同じとは思いますが「若いドクターがゐのはな会に出席しない」という問題があります。これは若い開業のドクターがいないという事と共に勤務ドクターが「おれはこの県には出張で腰掛けだ」という意識が強く、この県の同窓の先輩と知りあう必要もないということであろうと推察されます。また、おれは千葉出だ。自信があるという事でもあろうと推察されます。

これはチバイズム（Chibaism）の悪い点の一つだと思います。

ある私立大学系列は県の同窓会に上から下まで出席してそこで意見の統一をはかり、この意見をいろいろな会合で押し出してきております。

悪いチバイズムを捨て、先輩、後輩で心を、意見を一つにしていろいろな分野で活躍すべき時が来ているのではないかと考える次第です。

それには県や市のゐのはな会が開催される時には多くの会員が集まり意見の交換をおこなう事が大切だと考える次第です。

出張拠点病院の院長・医長各位におかれましては出来るだけゐのはな会に御参会くださり、そしてまた患者治療に支障のない範囲で医員を会に出席させる様ご配慮くだされるようお願い申し上げます。

（坂田早苗・昭34）

君津木更津ゐのはな会同窓会

平成9年度君津・木更津ゐのはな同窓会総会のご報告を申し上げます。

去る平成10年2月25日に木更津市内富士屋ホテルにおいて平成9年度の総会を開きました。当日はゐのはな会本部から肺外科藤澤武彦教授、小児外科大沼直躬教授の両新任教授を御派遣いただき、それぞれ御講演いただきました。当地区の会員数は現在109名で君津中央病院が41名、木更津病院（精神科）が9名、開業医が47名、そのほか勤務医や薬学部出身者が12名です。今回の総会は生憎の天候でしたが出席者は32名でした。会長三枝一雄先生（昭32、富津市、三枝病院院長）の挨拶のあと会計報告、事業報告を行い、特別報告として国保直営君津中央病院院長北方勇輔先生（昭35）の病院新築計画報告がありました。次いで藤澤武彦教授「早期肺癌の検出と治療」と大沼直躬教授「小児胆道疾患の治療現況と問題点」のご講演を拝聴しました。それぞれ御専門の最先端を勉強させていただき充実した総会でした。

記念撮影の後、川本勉先生（昭16）の乾杯のご挨拶で懇親会に入り、各世代が一体となって楽しいひとときを過ごしました。

（田中弘一・昭42）

クラス会

昭八会（昭和12卒）

今年の昭八会は、六月十四日昨年通り、東京ステーションホテルの宴会場で行いました。

でも会員の殆どが、体調が悪く、出席者は、久富良次、小松源二、菅井規矩雄と夫人二名準会員稲生襄の六名だけでした。来年度からは、残念乍ら宴会は止めにして「昭八会報」の発行だけにすることになりました。

（菅井規矩雄）

千葉県ゐのはな会

平成10年度千葉県ゐのはな会総会が平成10年6月13日(土)ペリエホールで14時から1時間開催された。

平成9年度の物故会員10名に黙祷をささげ、会長（渡辺　武）からの開会の挨拶ではじまった。

その大要は「これまでの経緯をふりかえると、県ゐのはな支部の設立総会は平成8年4月であった。

まず会則から協議し名簿の作成からはじまった。意外に難事業であった。

本部の名簿を参考にして、約3000人のなかからの抽出作業は、勤務医など移動が多く、正確を期すためその確認に手間どりご迷惑をかけた。

結論として大学、国立病院、療養所、県職員、平成元年以降の卒業生ならびに賛助会員（希望者は除く）以外の県内会員をもって構成することとした。1550人となる。

一方、役員の改選は3年ごとで、来年の平成11年がその年にあたる。

これまでの第1期は揺籃の時代で、各方面の方々には大変御世話になったという主旨のものである。

ついで議事に入り会務報告として役員会6回、総会1回の報告があり会計報告、監査報告で終わった。

来賓として御出席の井出同窓会長、学内ゐのはな会長から御挨拶をいただき、又引き続き行われた本部共催の懇親会に於いて、貫洞一夫東京ゐのはな会副会長より激励の言葉をいただいた。

最後に猪之鼻奨学会への協力について清水文七奨学会長から要請があった。

（渡辺　武・昭27）

〔2頁写真説明〕昭和36年8月撮影、全員が当時医進課程1年で卓球部合宿参加者。右から、折田勲・林道夫・谷口克教授・森田清・秦維郎香川医大教授・林龍哉・守屋秀繁教授・小林茂雄・太田東吾・大野了・伊藤達雄東女医大教授の諸氏

（撮影者　青木謹　昭36）

クラス会

白兎会（昭和17卒）

昭和17年9月卒業の我がクラスは、既報の通り「白兎会」と称して長い間、クラス会の運営をしてきたが、平成9年6月末にクラス誌「白兎」（第7号、卒業55周年記念号）を発行し、10月26日に卒業55周年記念の会を、千葉市のホテルサンガーデン千葉で開催し、「白兎会」としての行事はすべて終了することにした。以後は有志のみで懇親会を年2回位は開催しようということになり、本年は去る4月26日に東京ステーションホテルで昼食会を開催した。

寄る年波で体調の思わしくない者が多くなり、級友の出席者は僅か8名であったが、故人の奥様方が5名も出席され、ありがたかった。少人数ではあったが、各自、近況報告や感想を述べたりして、大変なごやかに楽しい歓談の一時を過ごすことができた。特に、故人の奥様方がいつも心よく御出席下さって非常に親しくして頂いているのは何よりもありがたいことで、心から感謝している次第である。ところで、長い間「白兎会」の運営について絶大な尽力をしてくれていた内田成和君が、昨年の春以来病気療養中のため、今回のクラス会にも出席できなかったことはまことに残念であった。我々が卒業四十周年の年（昭和五十七年九月）に新病院の前庭に記念植樹をすることになり、内田君の努力により辛夷（こぶし）の木を三本植えた。その後木が枯れたので、内田君の配慮により再三植えかえて貰い、現在のように立派に育ってきた。

本年も又美しい白い花が見事に咲いていた。この木の前には「白兎会」と記した小さな記念の石碑が置いてあるので、おついでの折に御覧頂ければ幸いである。この記念植樹は偏に内田君の尽力の賜である。

秋には又東京ステーションホテルで昼食会を開催することにしている。

（写真は、前列左より木村泰三夫人、村上正中夫人、浦部嘉夫夫人、橋爪達男夫人、数馬欣一夫人、後列左より大村光、藤村満寿夫、浦田久、窪田静夫、中村泰治、本間哲雄、下山賢次、水間正冬）　（水間正冬）

五五会（昭和30卒）

一九五五（昭和三十）年卒業生の同窓会は、卒業年にちなんで五五会といい、毎年五月下旬に持ち回り幹事の世話で、全国各地で開いている。今年は群馬県在住の二人が幹事で、伊香保温泉で開催し、十七人が集まった。

青木会長はあいさつの後、来年は千葉で開催し、東京湾アクアライン観光を提案して、全員が拍手して承認した。沖縄からはるばる参加した中野君が乾杯の音頭をとり、各人が平均五分間ずつ、次々と近況報告をした。

一時間余り経過したころ、ピッチを上げて酒を飲んでいた一人が眠ってしまったように見えた。しかし、向い側の人が様子が変だと気付き、部屋に運ぼうとしたが、ホテルには担架がない。そのうち、ショック状態となり、脈拍も触れなくなったので、万全を期して救急車を要請した。

心臓マッサージをするとともに、舌下錠をなめさせたり、胸部にテープをはるなどの救急処置をしたのが効を奏し、救急車が到着したときは、患者は意識を回復し、収容されずに済んだ。ほんの数分間のハプニングだった。

翌日は元気を回復して平常どおりになったので、予定どおり、バスで榛名湖畔を観光した。

参加者…青木淳・浅見敦・新井多喜男・内海晃・加濃正明・上牧順三・小泉準三・小林賢・高橋康・中野政雄・永野俊雄・村瀬靖・望月良夫・森田茂・山本輝通・横田俊二・吉原一郎。女性は旅行社添乗員。（山本輝通）

爾久会（昭和29卒）

千葉医科大学最後のクラスである我々（卒業時は千葉大学のなかの千葉医科大学で医学部でない）は毎年同級会を開いているが、今年は7月11日(土)におこなった。同級の多くが千葉、東京、およびその周辺にいるので、真中でやろうと市川グランドホテルに場所を選んだ。今年春に石島を失い、寂しくなったので、今後はみなが娑婆で頑張ろうと34名が集まった。

出席者…朝岡威親、荒木晃、有馬道男、飯田宏美、石川和男、梅村喜男、大藤正雄、大原一夫、岡野正、奥平昌彦、鹿山徳男、川野元茂、草柳芳昭、窪田（旧姓菅原）叔子、小出紀、河野（旧姓山崎）保久、佐藤忠夫、佐野迪雄、柴田千葉男、島崎淳、鈴木日出和、陶易王、遠山正道、富岡清海、中野繰一、根本幸一、羽生富士夫、樋口道雄、松尾成久、三好皓、若菜坦、和田房治、渡辺四郎、渡邊文武。数人の御同伴の先生がおられ、花を添えて頂いた。多くの欠席の先生からは時間の都合がつかなかったが、元気であるという便りをいただいた。カラオケがあったが、結局我々の年代は寡歌となった。翌日が参議院選挙のため、医療行政も話題に上った。来年は神奈川在住者に会のお世話をたのみ、解散した。

（島崎淳）

山紫会（昭和34卒）

4年振りの山紫会（昭和34年卒）が軽井沢病院の横山宏・片山純男を中心に春日建邦・野口徹男・赤星至朗諸兄の甲信在住の幹事役の肝入りで平成10年5月16日軽井沢プリンスホテルで開かれた。

山紫会の諸兄の28人の参加を得た。今回はじめて奥方同伴をお誘いし横山夫人・片山夫人・野口夫人・露崎輝夫夫人・塩川喜之夫人と賑やかに会を盛り上げて頂いた。我が級も多田富雄の東大定年（東京理大生命研）をはじめ人生の一区切りをつける頃合いではあるが、参集の面々いずれも活気があり夫々の話題に花咲いた感がある。飯田静夫・暢子御夫妻の若き日々、清水順三郎・精子御夫妻の学生寮時代の新事実の発掘、学生結婚先駆者の片山御夫妻の「結婚て何」と夫々別々の大学に通学された微笑ましい片山夫人の話などなど、現今の厳しい世間の景気の

クラス会（昭和28卒）

湿り気をからっとさせる思い出深い盛り沢山の会となった。片山兄の骨折りでクラシックギターの尾尻雅弘・明子御夫妻の演奏も一時を和ませて頂いた。翌17日は天気は雨との予報に雨でもやるぞと元気をみせていたゴルフ組の面々の願いが叶ったか夜来の寒雨も徐々に明け日中はさすが5月の薫風と多彩な緑と花をうたわれる軽井沢であった。ゴルフ組と観光組に分かれ軽井沢の休日を全員で楽しむことが出来、来年平成11年は山紫会の卒業40周年（なんとも想像出来ない年月ではあるが）の節目でもあり千葉在住の面々の幹事役でお祝いを計画しようという事になった。此度の準備から当日の細々とした至れり尽くせりの心くばりで素晴らしい会になったこと、当番幹事の皆さまご苦労様でした。

（谷嶋俊雄）

本年は昭和28年卒業者にとっては卒後45年に当り、5年ぶりに平成10年4月24日(土)、千葉市ニュー塚本ホテルでクラス会を開いた。生存者79名中40人が出席した。前回のクラス会は平成5年6月19日に卒後40周年の記念会であった。この間に田中穣君・高相豊太郎君・大石益光君・赤松暢君の4名が逝去された。開会に当り金子敏郎君の挨拶のあと上記4名の冥福を祈り黙祷を捧げた。

その後開宴となり、40名全員の近況報告を伺った。出席者殆んど70歳前後であり、皆元気で活躍されていることは何よりである。欠席者のなかには病気療養中である方もあり、情報交換があった。予定時間も延長し、一次会は終了し二次会にも多数残り、午后9時過ぎ再会を約して散会した。

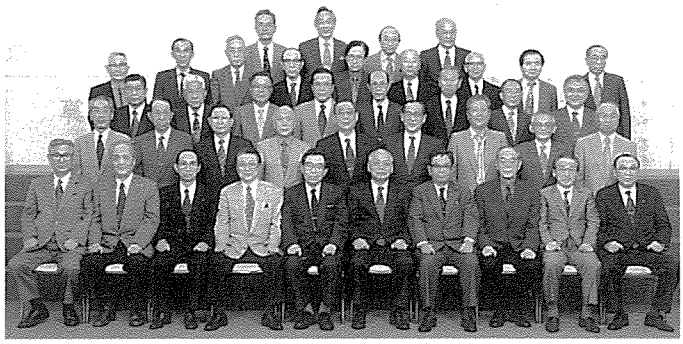
出席者左記の通り。

（敬称略、順不同）

秋山龍男・南部公明・安生久郎・飯森忠康・小幡裕・大久保春男・奥井勝二・加藤一雄・金子敏郎・高木清一・川辺兼美・窪田靖夫・小山隆一郎・黄彩延・鈴木正己・鈴木正一・鈴木正剛・瀬戸屋健三・平林健六・武野良仁・塚本勉・寺島克郎・戸賀崎義洽・中山善三郎・長尾守・浪川素・成田光陽・長谷川正博・平田正雄・古川英政・堀江勲・本位田泰介・松本龍二・水口公信・宮部政勝・望月俶・山下泰徳・山田達哉・吉田道・若杉幹太郎。

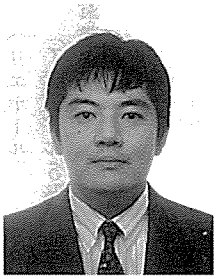
なお昭和28年卒クラス会では昭和58年に卒後30周年を記念して、ゐのはなキャンパスに、しだれ桜15本を京都、植藤造園より購入、移植した。今年もきれいな花が咲いた。植樹は記念事業として結構であるが、植樹後の手入れに問題があることは承知している。

（奥井勝二）



教授就任挨拶

大学院医学研究科独立専攻 高次機能系発生医学講座 発生生物学部門 古関明彦（昭61卒）



平成10年4月1日付けで新たに設置された大学院医学研究科発生生物学部門の運営を担当させていただくことになり、ご挨拶申し上げます。

本学を卒業して以来12年間生物学者として修業をして参りましたが、そのキャリアを母校に認めていただき、独立する機会を与えて頂いたことは、この上ない喜びと思っております。また、このような新たに設置された教室を一から築きあげていくことも大きな楽しみであり、感謝の念に堪えない次第でございます。

私は本学を一九八六年に卒業するとともに、谷口克教授（昭42）の主宰する免疫学教室の大学院生となり、四年間免疫遺伝学と呼ばれる分野で研究を行い、分子遺伝学の基礎を学びました。谷口研究室では、学問にとってユニークであることがいかに重要なことであるかを教えて頂きました。その後、一九九二年より一九九四年にかけては、ドイツのフライブルグにあるマックスプランクの免疫生物学研究所のRudi Balling博士のもとでポスドクとして働き、この時に発生生物学の研究をスタート致しました。そこで、何より印象的だったことは、複雑なことを複雑なこととして受容し全体を理解しようとする態度と徹底した論理性でした。また、そこでの二年半の間に職業科学者としての自覚も獲得したように思います。帰国してからは、再び谷口研究室で発生生物学研究を自由にやらせて頂きましたが、科学者としてのハードコアはようやく最近結晶化しつつあるかと感じております。

今後、税金に基づく国のお金を用いて、研究と学生の指導を行っていくことに、今まで以上に責任を感じております。特に、日本が科学を国の経済の基盤のひとつとして捉えていることは、私たち科学者や医療従事者が、経済のインフラストラクチャーの重要な構成要素であることを示していると思います。私達の研究室における発見やここから輩出された人材が、社会に貢献できるよう努力して参りたいと存じております。同窓会の皆様方のご指導とご支援を心からお願い申し上げます。

昭和大学附属豊洲病院 消化器科 松川正明（昭47卒）

平成10年4月1日をもちまして、昭和大学附属豊洲病院消化器科教授を拝命いたしました。昭和大学附属豊洲病院は病院長に消化器科主任教授の本学昭和37卒の栗原稔先生が就任しています。当科では主に消化管疾患の診断と治療を行っています。栗原稔教授の御指導を仰ぎながら研究と教育をはじめ地域医療に微力ながら尽くしていきたいと考えております。

昭和47年に卒業後、第一内科に入局しました。このときに故狩谷淳先生（昭37）が外来で診ていた潰瘍性大腸炎の患者さんを受け持った縁でX線研究室に出入りしていました。研修後に野田市キッコーマン総合病院内科に出張しました。当時のキッコーマン総合病院に、福永和雄先生（昭24）、川口光先生（昭29）、西村弥彦先生（昭32）がいらしており、いろいろとお世話になりました。出張後、第一内科に戻りX線研究室に入ろうとしたところ、研究室の先生方は大学から他の施設に移動すると西沢護先生から伺い、先生から君も来たらと話があり、結局虎ノ門病院病理学科で2年間病理の勉強をしました。この時に望月孝則先生小池盛雄先生に御指導頂き、同じ時に熊田博光先生と一緒でした。

この後、順天堂大学消化器内科に入局し大腸の研究グループに配属され、故白壁彦夫教授（昭20）の厳しい指導を受けました。X線・内視鏡検査による大腸のポリープの発見・癌の早期発

見が主な研究課題でありました。もう一つの課題は炎症性腸疾患で、当時あまり注目されていなかったクローン病・潰瘍性大腸炎について研究会があり、X線所見や手術標本の所見を対比して解析していました。この時に栗原稔先生は講師として消化器癌のグループを主宰されていました。一九八六年に消化器内科講師となり、一九九二年に昭和大学附属豊洲病院消化器科助教授として赴任しました。

同窓会員とゐのはな同窓会報編集部員との懇談の会

平成10年6月13日（土）12時～14時半、千葉駅ビル・ペリエホール扇の間において、ゐのはな同窓会報の今後のあり方について、同窓会員と同窓会報編集部員との間で懇談の会がもたれた。

このような会が持たれたのは初めてのことであったが、今後のゐのはな同窓会報について貴重な多くのご意見が出され、極めて有意義な会となった。

井出源四郎会長のご挨拶の後、嶋田裕前編集委員長から、ここ5～6年の会報発行の状況および現在に至る経緯が報告された。続いて、現在の発行状況および今後の発行見通しの説明が鈴木信夫現編集委員長からあった。その後、様々なアイデア、忌憚のないご意見が各同窓会員の先生方より述べられ、このような会の重要性が再認識された。

萩原彌四郎先生のしめくくりのごあいさつで閉会となったが、この会で出されたご意見・アイデアは順次今後の同窓会報に反映されていくものと思われる。是非、今後の同窓会報に期待して頂きたい。

今回出席された同窓会員および編集部員の先生方は井出源四郎（昭19）、貫洞一雄（昭22）、石橋祝（昭22）、萩原彌四郎（昭23）、伊東和人（昭23）、嶋村欣一（昭23）、市村公正（昭24）、富田裕（昭30）、村瀬靖（昭30）、嶋田裕（昭35）、青木謹（昭36）、松本生（昭36）、北原宏（昭43）、鈴木信夫（昭47）、白澤浩（昭57）、古関明彦（昭61）。

（白澤浩　昭57）

ゐのはな同窓会　平成10年度予算

収入の部

款項目	平成10年度予算額(円)	平成9年度決算額(円)	対前年度決算増減(△)額(円)
会費等	14,700,000	14,729,750	△ 29,750
他会計より受入	330,000	336,848	△ 6,848
寄付金	2,800,000	3,015,014	△ 215,014
雑収入	20,000	341,446	△ 321,446
前年度繰越資金受入	1,717,699	5,098,902	△ 3,381,203
収入合計	19,567,699	23,521,960	△ 3,954,261

支出の部

款項目	平成10年度予算額(円)	平成9年度決算額(円)	対前年度決算増減(△)額(円)
総務費	6,200,000	6,042,284	157,716
事業費	10,220,000	11,162,015	△ 942,015
積立金	1,900,000	3,600,000	△ 1,700,000
次年度繰越収支差額	0	1,717,699	△ 1,717,699
予備費	1,247,699	999,962	247,737
支出合計	19,567,699	23,521,960	△ 3,954,261

平成10年度ゐのはな同窓会　総会議事録

日時　平成10年6月13日（土）

場所　ペリエホール（千葉駅ビル5階）

事業報告

木内政寛理事より昨年度の会務報告がされ、同窓会活性化の重要施策（同窓会報の充実、ゐのはな同窓会賞の創設・顕彰、学内・学外への各種助成の充実、会費自動振替の推進）、昨年度の会議（常任理事会、総会、四金会）、支部ゐのはな会への大学教員の派遣、ゐのはな同窓会と顕彰規定の一本化、同窓会賞関係の選考（学術賞3、功労賞1、国際賞2）、医学部教育助成、図書館亥鼻分館助成の実施、平成9年度会費納入状況（76%）について説明があった。

議題

一、平成9年度決算（案）

中島祥夫理事より決算内容についての説明と笠川・国井両理事より監査報告があり、決算案が承認された。

二、平成10年度予算（案）

中島祥夫理事より、昨年度との相違点について説明があり、承認された。東医体への助成金が含まれている。

三、役員改選

常任理事に大沼直躬（庶務）、税所宏光（会計）が選出承認された。

四、名誉会員の推薦

近藤洋一郎副会長より平成10年3月に退官された3教授（三方淳男、磯野可一、新美仁男）の名誉会員への推薦趣旨の説明があり、承認された。

五、ゐのはな同窓会賞受賞者の決定

嶋田裕理事より、選考委員会による選考経過と、候補者推薦理由の説明があった。

第3回（一九九八年度）ゐのはな同窓会賞

功労賞

安村　美博（昭26）獨協医大名誉教授・微生物学
「Vero（ヴェーロ）細胞の樹立による微生物学・予防医学への貢献」

杉本　和夫（昭46）千葉市立病院医師・小児科
「アトピー性皮膚炎に対するPovidone-Iodine（消毒用イソジン液）を用いた消毒療法」

学術賞

大野　博司（昭58）千葉大助教授・遺伝子制御学
「チロシン・シグナルによる選択的細胞内蛋白質輸送機構の解明」

磯野　史朗（昭59）千葉大助手・麻酔学
「上気道閉塞のメカニズムに関する研究とその臨床応用」

篠遠　仁（昭54）千葉大講師・神経内科学
「痴呆性疾患における脳内コリン作動性神経系の研究－ポジトロン断層撮影法（PET）による測定－」

赤坂　武（平3）日本学術振興会特別研究員・免疫発生学
「哺乳類ポリコーム遺伝子による転写制御のメカニズム」

（受賞者の言葉は119号に掲載されます。）

報告事項

一、鈴木信夫理事より同窓会会報の今後の編集方針について報告があった。

続いて、ゐのはな同窓会賞（功労賞、学術賞）の表彰式があり、表彰楯の授与および受賞者挨拶があった。

編／集／後／記

「同窓会員との懇談の会」で、電子メールによる原稿投稿など会報のインターネットへの対応に関するご意見がありました。時代に即応した会報のあり方に関するご意見をお待ちしております。（白澤　浩　記）